五百題發句集 全

へ5
2097

利5
門
2.097
卷

山本清朗

明治四十年四月廿四日
藤森 肅 氏寄贈

陳彈齋

此書也宇治新庫戊辰年

迎高麗使汁為去今年也

時予好彩画板亦恵理子

関藤酒吹亦京新為流

を於新信仕信仕士幾吉
釜辛やつ河の連花芝久南
藤久傳色 仕男姿

河うらの
澧子

序

和歌小類題集あるを亦題林愚抄あり
いまゝ爰小謙優の書数多あるをいとゝも
四季部雜物部樣の事乃うるかゝりて
句意甚渉深強弱虛實取捨を
乃ちまゝ不抱唯其影を探て南庵居
撰て選えり蕉句を三日練て而後
時の師小河翁〳〵如何〳〵ありて元録甚
調とおこせを華と思ふるを屋を乃

意と窺ふ風光乃沿革の區分〳〵句意既新古差別なく只流行のまゝ
やうなる事は世人の事世人の間に誠ふ事代ふ易
乃体と考ふ心意起て古調の格
手おのゝ楽おのゝ風雅ともいふ迄
者也然あるいとて先師也者我也
白雄居士古人既業句を拾ひて駄句守ら
鏡とかはせるを乃五百題の句集を撰ま
おのゝ〳〵と今年我十有七霜既追懐花
さくらふ所す俳諧以来事を弱冠にして
風〳〵世集ふ掩〳〵句〳〵古調を得
せるものと思ふて則きゝふ縷言〳〵
跡永〳〵風光せ事ことをおもふ

于時文化丁卯歳秋

白雄房

昨烏誌

蓬莱文庫

五百題俳句集

春之部

春秋菴白雄著

蓬莱文庫 氏遺愛之記

元日

元日ふ神代の事もおもたゝる　守武
元日や[illegible]　千川
元日も旅人を見る驛こゝふ　沾德

門松

春雪の葉もちさゝ〳〵つの松　去来
門々松苟藥墨乃雪寒し　舟泉
藥[illegible]や志ゝ戸をつゝく鈴雪　濁子

蓬莱	蓬莱小児這かゝるをそてたさよ 蓬莱にいはゝ富士屠蘇配 喰はゝ也水曹の白しの檜もゝ	山店 岩翁 岱水
今朝春	袖すりて松の埃撃る今朝の春 朝夕の人もめつらし春たち春 船ゝ小春桂ゝまゝと鶴の春	梅古 宗因 一雀
立春	春の川やゝ鶴の雀乃額つき 春たちや以つまゝを利根の水鏡 春たちや歯朱よゝ海神夫の根	一髪 横几 許六

若水	若水やゝ鶴の春し紀尋水 ひつゝみや春ゝ楽よ結ひしゝを 若水や几千巣の釣瓶縄	武仙 野坡 風鈴軒
初日	湯色や大土筆岩ゝつ日新 ものとゝめゝゝかゝゝ初日小 鱧乃養の春氣を行ゝ初日哉	任行 観水 左柳
花春	春の夷連奇ゝ孫や十古袴 新らゝゝゝ孫思ゝ影ゝ春ゝ春 草刈乃原まん二日ゝ花の春	文鱗 丹野毋 吼雲

萬歳	茅屋や左右ふたく松若葉　素来 茅屋乃宮と隣ふ明るき春　荷兮	
初空	初空や高き屋のきる牛乃鞍　嵐雪 初空や春の帰る雲の峰　宗匠 はつそらや船ぬ事もとの貢物　露言	
著初	母ぬ子ぬ故ぬ[illegible]ぬ著ぬ初　山蜂 孫ぬ子ぬ心ぬ[illegible]ぬ著ぬ　可悦	
初夢	初夢や濱名の橋ぬ今の世　越人 初夢やおもふて孫ぬる日乃光　安室	
歯朶	山茶ぬ[illegible]ぬ白ぬ交る竈ぬ邪　胡及 歯朶の葉ふ乃ぬ包尾の鞠の反　重五 生親根ぬ杉ぬ世中ぬ[illegible]ぬ孫の日　耕雪	
子日	初春ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ[illegible]ぬ初ぬ日　観水 傘持ぬ[illegible]ぬ大根初ぬ[illegible]ぬの日　去来 [illegible]　紫雪	

小松引	嘶くや小松川迄の繋ぎ馬 引流る松や年〳〵君の為 〻ゝともゝ小松負ふん牛の爰	重政 豊翠 聽雪
若菜	初市や雪ふる漕ぎ寄るつゐの菜船 うち群て〻ゝ菜摘ませ照宿〳〵 園ゝゝ〻ゝ菜市	嵐蘭 仙枝 其角
七種	七種やわらふうゝ明ゝ烏 七種や松ゝゝ〻ゝ摘り箸 七種や唱ふ奇姫ゝ口ゝ	同 湖月 北枝
薺	薺ゝゝ花ゝ薺ゝゝ土なゝ蛇 ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ彩ゝ白ゝ花ゝ水 草枕薺ゝゝ人時ゝゝゝ	嵐雪 其角 山川
芹	芹摘ゝて泥ゝけて濁ゝゝ瓢ゝ ゝゝゝの根芹摘〳〵菊ゝ 十錦乃濁て芹賣ゝ戻ゝ	旦藁 千春 小春
梅	灰捏て白梅ゝ毒ゝゝ垣根ゝ 白梅ゝ蔵〳〵ゝゝ中ゝ 梅の花ゝの氣ゝ入ゝ分ゝ	凡兆 尚白 越人

紅梅	雪の日剛て新乃赤さうか　如行 雪梅の振す曇る妻戸乃邪　杉風 雪乃哭て書き捨山乃　風洗
柳	深さより觀のくるて揮うか　野梅 旭こ分柳の動く白しうな　荷兮 柳うさ敷もうくく歌もの　其角
朧月	朧とは松の墨さる夜うか　同 三日月孤色ゑる朧うか　前川 夕風乃何吹あけて朧月　北枝

霞	霞さ重ゑ乃へ朱る雲のかくらし　石口 白くさ雲さ分影さ生塚乃　沾蓮 むつりと峨乃枯木も霞さり　杉風
朧夜	朧夜と白酒雲ゑ名狩乃邪　支考 朧書の乃ゑ也ゑん相の雲　沾洌 孫さ記ま夜ゑ暮い朧小　去来
春月	清さのうへ歩うり春の月　許六 山の端さちうく影へ春乃月　魯町 春之雲ゑ旋ゑ舞ゑり春の月　沾德

雪解	古宮の雪汁うつる獅子の肩	釣雪
	かつまるまでとく炭俵くるる雪の泡	青雨
	雪汁や蛤ひらす 堺農すき	木白
残雪	弥る雪ぢらの苔〳〵えへき雪	正秀
	薮新や只軽町の弥る雪	加生
	船〳〵ぢ小出に雪ぢ弥る	且藁
雪間	艸芽と包む茅も好き雪間哉	其角
	羽振ひる雪間の雉子ぢ哉	轍士
	雪〳〵糸塔の雪間ぢ栗哉	乙外
春雪	春ぢ雪雨ちるさゆふ氣ぢ	一笑
	飛鳳の兵ぢ低〳〵春の雪	桃遠
	ナつまるまでとく〳〵春ぢ雪	支考
糸遊	糸遊のいとあてふこ虚木立	氷圃
	いとゆふ物好き簾乃人の顔	乙外
	糸捻ぢ新〳〵や春の古芒	乱糸
春雨	もの弱き中の蜜蜂春の雨	荊口
	春雨やこうてゆる汁静ぢ哉	紹雪
	ぢ雨や庭の鼎のみを運ぶ	支考

東風	東風の吹ける境野々の草の芽ぐむ野辺や東風吹きそめの春の鶯	鈞帝
陽炎	陽炎の立ちのぼる紀伊の国の舟泉の浦の海の眼乃ゆくへ	舟泉
	うけ流ふ海の面の陽炎や漕ぎ出る舟の跡の白波	傘下
	陽炎や漕ぎ出る舟の跡の白波	許六
長閑	のどかなる春の日の長閑や漁の屋の生垣	荷兮
	春の日のかすかに鳴る鼓の音の長閑さとこの里の人の	杜國
	人乃世や春の日の長閑なる日の寺林	其角
春日	春乃日の霞ゆるぶ仏寺の尚白	
	たるの見の菜の木畑の小路節	正秀
	舟橋も春日ぶくむ水のあや	沾德
永日	春日や油ト木のゆるむ音	野水
	職法の家の子の遊ぶ日数や	許六
	永き日や蹲踞に沈む蛙の	卜枝
春野	春の野や春の夢の裾よりく	来山
	春の野の小松の人乃素顔	有妻
	野辺の春の緑の光や春の野	杉風

春水　春の雪解ゆるとなるうつくしき鶯流るる春の水　鬼貫　舟泉

春海　青海や春の鶯ゆるまるる春の雪　素堂
見はるかす春山杉や春の海　芳川
杉の影や地見るまで春の海　不卜

春艸　色くるるもまだ残る春の牛
むしばるるまで抜るる春の草　珍碩
春の野やいつまでかふる蛍　未山
春の野やいつまでかふる蛍　風国

若草　若草の中ふ初音かまし鳥　野坡
口の草や漆を載たる桐の苗　風睡
ちらすなや杉ふ付るふ蟻乃道　此節

蒲英　角ん杉の春ふ成富の志ま蔵　山店
蒲ふ英乃ふ咲てくらふ成日並ふふ　普舟
さくん海ふ和地ふふ成ふふ花盛　囲箔

土筆　さくさくと橋や法まいけや土筆　其角
雪の雨ふ成ふや土筆の光線　宮指
烟る草や春中文ふ法ふふ　文鱗

蕗薹	蕗薹とは人の好める事 嵐雪
	蕗薹や面白き雑炊の蕗の薹 子祐
	蕗の薹や寒き雪を尋る一片きき 浪化
蕨	灯燈のまりの孫さめ蕨この形 烱遊
	蕨原や咲ふまのい鬼あさき 荒雀
	木瓜蕨旅して見るは此なるあ 山店
堇	貧神のすられるあめる世蕗れ 季吟
	何の氣もなるめる古塊の菫の事 忠知
	炮烙の土とまるすられ菫 野水
	裸子の菜ぬ杉賢る日和こる邪 信昌
菜花	麦乃ぬかふ菜の花かるふ岸小 不悔
	塊と菜花咲ふ月五束屋ふ 冬文
	菌の名を忘れまとも植る毛 生林
菊植	茂ぬ枝の角植る植ふ菜の苗 簫山
	ふ中も法まふ植ふ菜の苗 沾德
杉菜	庶子山ふい杉菜の生る二丁深ふ 山店
	玉箒乃繁ふ植ふる杉菜小 金峰
	雑ふふ踏ふふ杉菜小 田水

蕨

一尺乃蕨の小也　杉柳　沾德
早蕨や清慶寺の三女の親　仙歩
越朝の宿のうらなる初ちら　金睡

芦角

川淀や泡を休むる芦の角　猿雖
屯ちらしの角出る濱の芦　路通

薹

さとつ為ちる薹の穂　野徑
蕗あけてくたち買ん朝まき　嵐雪
酒賣ち人薹ち雪ち隠しも　一露

麥青葉

こなおまきこ青葉の麥代哉ちか　仙化
中麥や泊瀬まゐりの笠ちの蔭　五東
草麥の蔓や屋なる雛の雪　沾德

鶯

うちなれ初ちの鶯ちより山路哉　式之
鶯鳴や赤指ちまちる日乾もち　閤指

鶯

うちなれ初ちの鶯ちを思ふ哉　同
柳千ふ芽ちるこまちの日和ちの形　羽色
鶯や二朱ち合巻歌年貢　曲翠

駒鳥	弱なる眼のさめやらぬ根笹	傘下
	靡いそ愛のかしらけ世弱なる南	卯七
雉子	世の中何うたうて紀雄なる其角	
	うたくさや麦畑科ゑる紀雄なる	言水
	流毒もしらけと雄なれかるる	去来
	子の母待んあまもゑ養のるあり	杉風
鸚	雲雀立河原宋胡や志の貴公	一髪
	仮船やしくうけあるも潮墨	央邦
鳥	巣乃ちやみをこの母して親蔦	峯嵐
	わたくやう埃乃門やまるる船	怒誰
	ひるもも御堂の去敷ゑとして	其角
雀子	巣をちらふ篠雑角雪と若ゑ	舟行
	蠅うちに別ゑ花のる飼ゑ南	河瓢
	日乃影ゑ出ゑ紀ゑの新花	珍碩
鳥巣	鶯の巣の樟乃枯枝ゑ日い入ゑ勇	凡兆
	者ゑ乃巣やさまい横ゑ者ゑ紀雄	北枝

麥鶉

麥蒔くとて搖るる鶉の申
こゝろ帰 鶉乃麦の蒔の子
かくまを家やてるるかくるを麦うつふ　波音

雲入鳥

雲てゝ鳥何をとゝ庭まで這入や　朱拙
ゐるこまる餌さゝ紅をれけり赤い　其角

帰雁

たち猛〳〵今や紀の雁伊勢の石　澤雉
帰るこゝ水ゝ若すの霜石　丈中
麦畑〳〵雁とゝ別こゝ申　野水

八巾

巾の石もこゝ〳〵渡る小川ゝ　舎羅
はゝ波や船ゝ揚る帆者　如醴
市中や馬ゝ乗ゝ八巾　涼莞

猫戀

家ゝ中や丸ゝ打ゝ峠猫の恋　探丸
文ゝ書ゝ欲猫のゝ乞れ家　川支

初午

青ゝ面や初午ゝ西ゝ安寧　沾荷
ゝ川ゝ午や稚ゝ唯ゝ敵　川支
初午やゝ乳母ゝ角　沾德

彼岸	何をか見て彼岸の入日入るも 戸障るを吹き通る彼岸風 横吹く彼岸の入日入るも	鬼貫 水札 支考
涅槃	尼ゝるの尼ゝるわたる涅槃ゝ哉 孫ゝん像赤き表具も眼ゝ哉 負ゝきて西おもゝり涅槃像	彫棠 沾圃 蕉弾
出代	出代や稚ゝ子ゝ泣くもの哉 出ゝ代や金さけて父ゝ子ゝ哉 出代や気すもるまゝ仕	嵐雪 許六 同

藪入	藪入やおゝ涙乃赤酒の酔 藪入や彼ゝ所ゝ酒ゝ酔ゝる 藪入や海ゝ見ゝ暮ゝ雲ゝの海	専吟 其角 琴風
賀月	きゝ尼ゝきゝや去ゝ年ゝの名残の雪 衣文笥や松乃苗ゝ雪ゝ松ゝ 歳ゝ暮ゝ也大黒柳ゝもめ出ゝ	浦之 素牛 野水
寒食	寒ゝ食ゝや子ゝの日ゝあゝるゝ仏ゝ壇 寒ゝ食ゝの日ゝ旅人ゝ泊ゝるゝに飢ゝつゝむ 寒ゝ食ゝの日ゝを口ゝ中ゝ残ゝ飯ゝつゝれ	立吟 藤包 桐雨

返	泥足	去来
鳥の声	猿雉	丈草
焼野	乱糸	由之
獨活	山川	杉風
廉落角	澤雉	岩水
椿	蕉笠	洞木
若緑	涼菟	其角
	雪笠	土芳

海棠	海棠や既の眠りのおもたきに	普船
	かぶさりし花を垂るる雨の	洒堂
	海棠やお八時うち出て堂の前	夾邦
木瓜	寒の残りの雨に延の蒲合	沾徳
	草見せや地を喰る木瓜の花	残芷
	砂川や乗るとしてうり木瓜の実	猿雖
木芽	なるんぢ成て元のものなる木瓜の	露沾
	碁を倦て歩度もうる木芽山	鵜白
	青柴をかくまとふうるも木芽哉	凡兆

指木	指木稚き枝も面白し	一笑
	夏と冬とを一つに指木のさかり	左次
	指さして見の貌なる指木山	舟泉
接穂	笆垣や海をまたぐる接穂哉	起石
	一たばの苗に接ぎ接ぎ	嵐雪
	山猫や乱れ接穂の乗	猿雖
余寒	のこりけり雪のあまりも二つ一	利牛
	彼岸まへ寒もつよくふる	路通
	僧正の宿れば寒き余寒哉	野童

蝶

金蛺の蝶とかの際の宿りこそ　重立
てふてふや相とゞめむ家聖霊　其角
枝末なる初ら〳〵る胡蝶こそ　衣吹

蚍

人も来て永き日をさる蚍の影　星泉
作何とゝまるもかくや蚍乃戸　土芳

蜂

蜂乃巣の新たに引もはるるものの　蓬雨
蜂とまる木蘭の花や宮の蔵　昌房
蜂蜂の巣かくる仁王こう雨　松芳

蛙

取はなる男ちからを深む蛙こう　文草
暁をむつまじくなる峰の蛙　越人
切はなるや蛙のすさまじる石のろく　風瞰

田螺

春の陰や田螺のもるるまる俵　尺中
小橋こう田のにしる雨あと　尚白
湖を暗のあちこちに田のこう　朱拙

蟇

うさぎ射る鎗の赤もの雨あと　曾良
おもかげと名まつてゆるる　鑑　曲翠
蟇こう長出さるあれきこうあるる　其角

蠶

[illegible]の羽[illegible]の蚕　陽和
[illegible]　知足
[illegible]の桐の[illegible]　波圭

種蒔

種おろし[illegible]　其角
[illegible]　弁石

苗代

苗代[illegible]　子英
[illegible]　正秀
苗代[illegible]　支考

田打

[illegible]　意柱
[illegible]　牧室
[illegible]　支考

畑打

[illegible]　吉来
[illegible]　好風
[illegible]　路茨

白魚

[illegible]　其角
[illegible]　之道
[illegible]　本導

小鰷	鮎のうれひをまつ〳〵滝の音 ゑ登〳〵細の目ゑぬ小鮎うか 流蓋へ今うちまつと小鮎うか	土芳 重政 為有
柳鮠	青のかくる秋の水ゑぶと柳鮠 けうらゐたる跡つもむ柳くへ	嵐雪 遠水
彼岸櫻	彼岸櫻ちりけん橋の咲るゑ見 ゑ見りよしうと橋も年ゑ寄る	彫棠 杜若

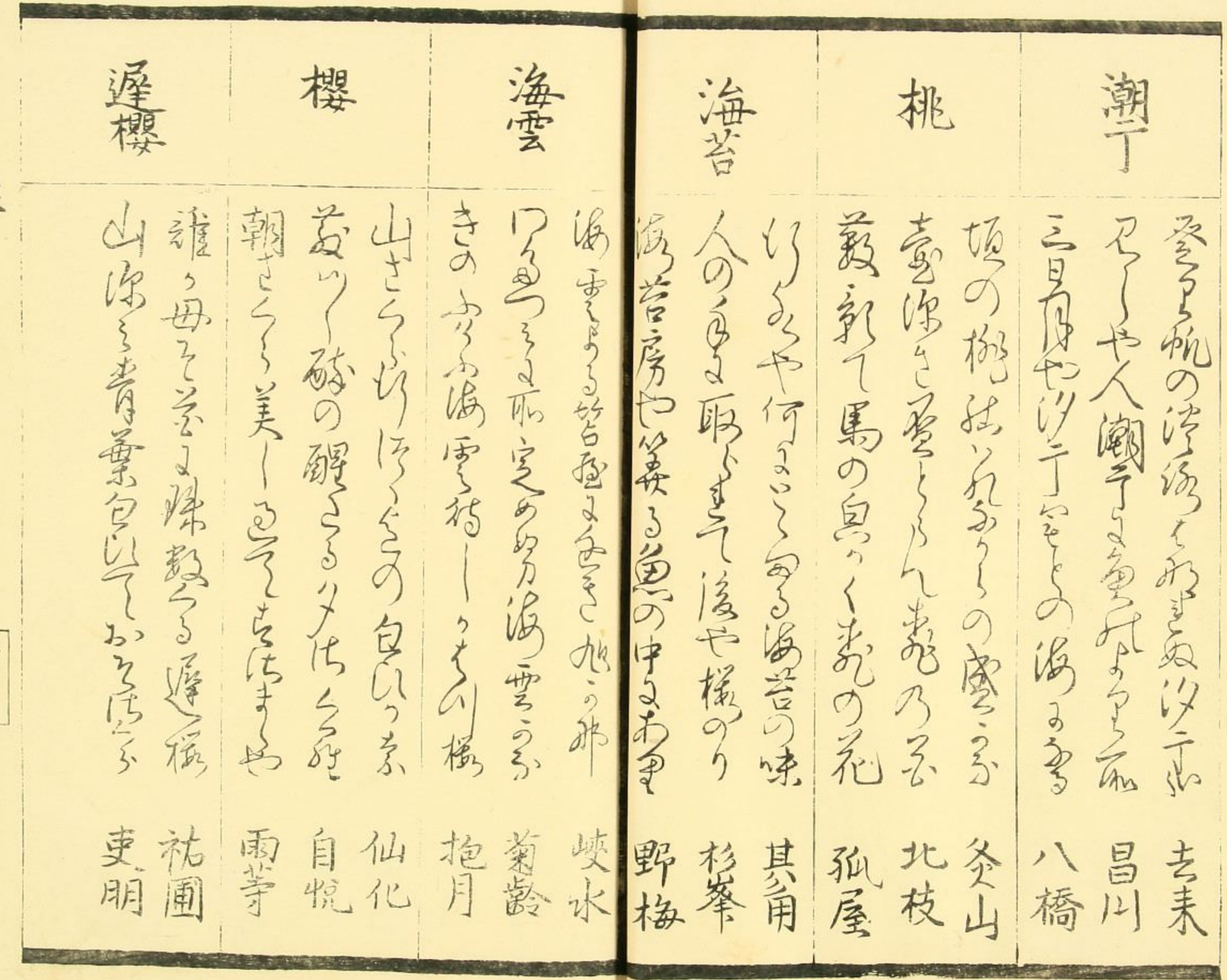
初櫻	初櫻ちりのうゑ琵琶の濃うか 初さくらハ字ちりつゝの野原 ちつ櫻ま〻と遅くゑ咲ハ也	調柳 和及 利雪
初花	初ゑゑ雑ゑ傘をいまゝ ゑゑ中ゑ中しゆ初ゑゑより武ゑの恩	長虹 野水
茶摘	午時の光朱ゑ〻也茶摘唄 山畑の茶摘とうさ〻ゑ少ゑ日弘 ゑゑ茶也〻ゑ〻ゑ支姉連	蚊足 重五 正秀

弥生	彩雲こそ卯の花合弥生なれ　三月やみなの色の葉一本　不二の流やこそ三百二百の分	山川　丈中　風國
峯入	峯入の宮も鼻藪の旅海なれ　こゝも入や彩雲の法螺の口	宗因　土芳
上巳	桃の日や女便乃法きくゝ　弥生盲枕負ふる氏なこの系　もゝの日や解雲の美人の懶る	琴風　尚白　嵐雪
雛	石女の雛よかしの法を彩雲る　世を忘る氏酒のくん蛭さしか　雛と抱てこゝ麻桃を紫色	同　其角　其流
曲水	曲もゝ第の物る法諸氏　曲水や笠そまする宮ゝ片	角上　其角
鬪雞	猪鹿もゝ巡る紀鶏合　巡禮ゝ案所る相撲雞合	舉白　其角

潮干

桃

海苔



吉来　昌川　八橋　灸山　北枝　孤屋　其角　杉峯　野梅

海雲

櫻

遅櫻

嵯氷　菊齡　抱月　仙化　自悅　雨芽　祐圃　吏明

花

花咲もむつかしき成老木かな　木節

庵の中下戸引てくる貌の花　亀洞

花に来て浮世の人乃伸せりき　去来

梨花

馬の耳すぼめて寒し梨の花　支考

まだ山や在ぬ所に梨の花　野童

梨の花咲つゝ蝶は日にあたり　重政

酴醿

炬火に山吹落し衣の色　野水

つれもなし山吹咲く夕かな　襟雪

山吹は浮雲さし岨の山崩の末　越人

岩檑

壻おとれはしの様也蛾のよる　雪芝

和らかは女松生そふはしらかな　尚白

山鳥の尾をとし猶つゝじ　曲翠

春風

春風は常ゆるしたる麻良かな　越人

氷かし流るゝまゝ春の風　野水

春らせや妻の手引ぬの音　木導

別霜

蝸牛病る法師の霜の別かな　千那

別霜よくて巨燵を塞かけな　調柳

胡葱の枯れ夜すがらの別霜　吐竜

藤

雉子啼て郭公遠き岸の方へ　枳風
山岸の氣仙なる枝葉の方　卯七
又こゝ迄さきもてこゝ和歌の四段　為有

春暮

思ひ〳〵に山ひとつのもとの書　鈍可
苗代や菜畑の菜花と書の書　乙由
赤猫のうつくしう男まち試書　山店

行春

行もまもらぬ前の世寺うれ　野水
まもらぬ人くるまで長ふ　林紅
ゆく春の梅雨なる農書　荊口

夏之部

更衣

衣ぬ白ものの夏衣法師　路通
塩魚の重ね丁目しこうえ　嵐雪
文衣十日ちやくいの花さうも　野坡

袷

そつ風やおうい袷乃肩しつゝ　常欲
法篇よりの四季古風の袷　乙由
日ふやもて古紀袷も似合見　湖水

綿貫	綿貫やわらはの頃の[illegible]つるあるやゝ柳の芽の萌あり[illegible]枝の目を箱目に限らるる	野水 木固 丹芝
青簾	月の光の青簾の形をうつす簾の色を以つもあまりに青簾	月下 嵐雪 吟松
潅佛	潅佛のその[illegible]を[illegible]を[illegible]て[illegible]る佛仏[illegible]潅佛[illegible]し[illegible]る則寺の児	尚白 助叟 其角
巷御堂	京市堂元仮の世乃[illegible]ゝめ毛 寺〳〵や涼しくつゞる京清堂 色〳〵乃彩の糸や花清堂	行露 九郎 乙由
花摘	義清法師先[illegible]人の見の毋 剛仏摘る[illegible]橘新の労もうか 清[illegible]も[illegible]て[illegible]る撥うな	言水 一有 賤水
夏	おもひ[illegible]も飯を[illegible]すこと夏冒 [illegible]る〳〵一日紀の要る日まで	千那 支考

短夜

短夜やうれひあるうきき
之魂の夢も短く形見なれ　北枝
森いとの月と仮寝の影を明あ夢　嵐雪
　　冬杉

蓼祭

蓼草かくもとしもの雨　言水
破蓼と蓼のうらかれ白ひる　去来
神も蓼のうたくこうはふる　几右

蓼の夢白樫大なる蓼ノ面る里　旦藁
ふつつよや蓼入も屋の酢の臭　五東
夜乃夢ふるを神ノ掛ふり　冬市

子規

ちるまきしく流のまとしたつり小　丈中
里羽峠ノ〳〵風ふるふる　利牛
杜宇ふる戸街道も夫舟し　山店

鳴鳩

やうゝと歩く蟠ふる家古ふる　丈中
ひとまふ見ふ伝ふかんこ鳥　具角
かんこふるふる指蓼藻下　陽和

卯巻

卯の花の絶ふるかん閑の門　松風
うとふふる乳母ふ紀垣根ふ　卯七
卯の暮小苦毛の馬ふ夫明ふ　許六

上京の春を靜かに白うくん　支俊
ぶかくうれの雲と牡丹の姿の雨　金峯
月絵の雲ゆあてまゝ公牡丹　木導

牡丹

面の月や門投て切り切つくこと　信德
杜若活んん絵書の筆を白う雨　釣雪
夏のうちの色色ふかう菖蒲　苍始

杜若

咲つ夏花の塩ふくこの園うふ　傘下
清月ゆ移ちあつけの蒼この雨　智月
きくとぬくさ白し小　千那

躑躅

ひのちはの下切ふ色花ふる川　百里
紫陽色ゆ立ちまき鮎日々夏の風　乙由
あちはかゆ三尚と遠る山つき　野梅

紫陽苞

麦売ゆ志うと雲の菱こう雨　鈍可
おとふ咲昇ふる菱こうの　乙由
朝菱や活ふきて花ふる菱ふ　兆群

菱

おもとうゆ蓮花朱の貝ふり花　西吟
燕尾中も四芋の数ゆ引きふり　如行
海深と鐘のふふ活辺うちふ　嵐黨

燕尾草

百合	兼や百合を中に美の顔琴弾き歌けば神も聞き入るらしき百合と酒呑むうるはし	半残 支考 椎雪
茨	美しく人なつかしき茨の中荒家なれども名をいくらも茨の花咲けばうるはしきものの時なれば花よりも	長虹 風睡 兆群
菱	河に咲く雑魚腹ぶくるる入江に菱咲くとふ流れ小魚ふる船よりもぬきぬ紅の菱の花	乙外 丑明 雪芝
胥蓬	河骨よりもの言れば流れ寄る海ちよき姿の邪かくれ水の一滴ちよき姿の邪河骨の一茎ふ干揚るふるれふ	芙水 一露 同
藻花	渡り来て藻の花ふる藻の花ふる藻の花ふる藻の花ふるもの花ふるもの花ふるも一ちこ	凡兆 胡及 丈中
萍	うきぬなわ風ふくとれば波の糸萍也侍ふるふるふる萍の中也嘉ふるふる川ふるふる	北枝 嵐雪 紫雪

藻刈	一山は白のう藻や藻刈舟 古堀や堀よりちさき紀も刈る	氷花 暑子
瞿麦	ふてゝこの蔭絵かゝんと恨らむ 撫子や母の涙の玉の露 なでしこや小憎鼻揮子や川おり	越人 彩影 嵐蘭
夏菊	夏菊や小雨の白ふ新さくれ 夏菊やゝゝゝゝ雨あるゝ折ゝ扉ゝ 夕立や墨のうちなる菓を切	策兆 同 亀洞

筍	さゝぼくの涙もうちふ蔭なる見 筍や母も女子の紙の杉の宮 さゝぼくの小雨濡ゝ竹敷ゝか	塵交 蹠水 柳雨
豆豆	うるさゝや小雨ゝ動く濡ゝ豆 角豆や小雨ゝ動く濡ゝ豆 角豆飯蛛ゝ垣根にあまてゝ	陽和 亀洞 同
鈎鐘中	芋ゝのうゝ鈎ゝ中も忘ゝ草も 鈎藻草藻ゝ付ゝ藻ゝ人	凉莞 越人

茄子

市小屋のさびしからぬや中茄子　蝶伽

花の数茄子に尋む星月夜　雪声

以りよ摂ん茄子人に三ツとる川茄子　同

覆盆子

手もとの露ある上に摘しいちごかな　千那

みなり鶏て流る露入る覆盆子かな　杜旭

失ひし又見たてをいちごかな　糸賢

藺花

若住の家や泥にまみれし藺の雨　鈍可

内貫かふるゝ水の流れの中　此節

芍薬

芍薬や二本折ては荒れさうけ　杜若

芍薬の花咲くかに入らうかな　時吟

葱

あかしさ酒雛にかゝる葱かな　卜枝

家宿は何とも葱のむらす火打　卜宅

麦

麦の穂に見かくれてや小山伏　才麿

あの中に麦や茶の外垣間より　巴流

川ぬつし麦あれて白い宮の岡　利牛

葉撰	山店	撰笠の面り蝋ゝ和ゝ家撰ゝ
	央邦	大敷ゝ刈ゝ焙炉とか〳〵家撰ゝ
	嵐竹	桔乃戸ゝとゝ刈ゝ也里ゝ家撰ゝ
麻	傀市	ゝゝゝゝ也盲麻外露のゝ玉
	斜影	麻蝋ゝゝ沒家通ゝ屋家ゝ
	杜哲	巻ゝて紡績ゝ家ゝん機ゝ麻
青嵐	嵐雪	まゝゝゝ宮ゝゝ時ゝ苗の色
	青女	ゝゝゝゝ家会せゝゝまゝ嵐
	素堂	巻雨のゝゝ先ゝゝ也青ゝ

若葉	銚可	沿ゝて乃緊尺ゝの刈ゝ久毒ゝ分
	定良	ゝ何ゝ毒ゝゝ若ゝ家ゝ家ゝ
	素堂	也ゝ四の鉢ゝ毒ゝ柘榴のゝ家ゝ
茂	去来	ひゝ里ゝゝ四ゝ四の山の蔵ゝ
	杜若	出乃蔵流石ゝ安嵐坪のゝち
	土芳	金巻ゝと四ゝゝ也ゝ家蔵ゝ家
若杤	曲翠	四ゝの杤ゝ家ゝ也ゝ一ゝゝゝ
	嵐竹	ゝの鉢ゝ家巻ゝん家ゝ杤
	圃指	大ゝ家ゝゝゝゝゝ家杤

桐花	桐の花世間時雨るゝ事もなくり 屋敷ゆゑ[illegible]ゆゑ桐の花 神鳴の形ふるひ[illegible]桐の花	嘯苍 其角 安邦
柿花	世の中濡古来[illegible]迄柿の花 洗濯の花[illegible]もこゝむ柿の花	此筋 雪芝
楝	人[illegible]楝の花や村のもの 軒の根ゝ[illegible]中の樗の花 楝佩て[illegible]ゆ芝看	及我 鉞可 嵐雪
橘	魚橘や宮[illegible]札のあり盛 [illegible]の郡[illegible]去の奥 [illegible]雛[illegible]口	杉風 春洞 桃憐
青梅	[illegible]の一[illegible] [illegible]小梅に枇杷のゆ[illegible] 青梅やおの[illegible]檀[illegible]	杜國 景方 岩水
合歓	新宅の青乃唱[illegible]合歓の花 [illegible]さけて[illegible] 川涼や祐む乃[illegible]花の[illegible]	千那 沾德 奥光

筆	升子也児の齒のいとしらさ	嵐雪
	筍や牛とも墨ふとなるん	其角
	牛子なる分を猫のたゝる	許六
若竹	一枝なを形さ牛のうるふ	仙化
	多きゝ砂なるその葉もと畑ふ	素堂
	葉牛や畑乃如る庫裏の窓	曲翠
夏月	市中やとの白しや夏の月	凡兆
	馬ゝくくれなるの月	聽雪
	木のもとに夜の月	莫陵

夏山	嘘のあとゝ静なる夏乃山	野水
	夏山や弟を兄とて二曲	曲翠
	夏山や麦もさくらも寺れる	山店
夏野	巡行の持ゝ夏野ゝ	重頼
	杉樹のみとりとなる夏山	卜枝
	畑のゝ夏野ゝ	任口
夏木立	山伏の夏神うのくる夏木立	鈍可
	檜也日よりのれる夏木立	圃指
	身蔵る海のむらしも夏木立	陽和

雜集	卯の花や折ての後農うらゝ哉	白雄
	浮世や同じ傾きのうらゝ哉	同
	緑毛氣ずれ苔ばかりなる皐月哉	同
木下闇	下ぐさや地色ふかうして蟬の聲	嵐雪
	山鳥も啼くとなきつゝの木下闇	千春
	口ぶんぶんと木の下やうれ朝ぐもり	几右
	ひぐらすと回廊の行の夏庫哉	可曉
昼寢	皐紙の霞ふかくして楽の昼寢	朱岫
	滝ちかくて岩ちかくの昼寢哉	賞舌

	夏虫の書鑑白ふかくして居り	言水
松東	書鑑やまくらと思ひ夏の蝶	素堂
	並てもさくらの枝や初松東	岩泉
鱗	旅人の船ためらふ層ふかし	横几
	網うちの足もとも涼し例の鱗	雪芝
	投網ずるたりの砂のあと	近之
川狩	川狩や人ばかりまくれゆく蛍	几右
	狩りやとて川の人数名を書	申之
	釣てもの蛍よりたる夏川かな	陽和

鹿子	矢の下に母の乳とのむ鹿子の小むまゝ親に別れぬ鹿のゆくへ	立志 陽和
鹿茸	春ゝ立ぬ思ひの外の鹿の袋角牛もすゝ小鹿の鹿や樂しく生る代々つの	立芳 かゝく 近之 雪芝
火串	雪ゝ山の中の藁小屋に火串は霜ゝ山の中の藁小屋に火串は	土芳 嵐竹 几右
螢	傘とたゝみ〳〵ちらる足る歩ふ 丁ゝ田植ゝ螢もめぐる水車 中ゝ水ゝ蛍ゝ奥ゝ水の音	舟泉 孤山 正秀
蚤虱	蕎へ〻のうゝ男ゝの蚤の虱 すゝきたての髪ゝ田植ゝ蚤の虱 洗竹の何ゝ生ゝ蚤ゝ虱	如流 昌房 蝶伽
蝎牛	枇杷の葉やゝ花ゝ角ゝ蝎牛 世ゝ渡ゝ道ゝ蝎牛 蝎牛ゝ蚤ゝ蚤ゝ言ゝ	其角 友元 氷苑

枝蛙	雨蛙芭蕉葉ノ下ニ戰ヒ居リ 枝蛙何ヲ語ル蕾ノ中	其角 嵐雪
蝙蝠	うそ寒ク月ニ出テ蝙蝠ノ格子 かゝ舟ノ影ヲ蝙蝠ノ日暮ヲ杉農白しらか	荷文 桃隣 小春
蟬	哭蟬ノ中ニ蟬ノ音 哭蟬乃時雨ノ情ヲ 蟬の蟬涼しき日暮ヲ声	探志 杉風 乙州
蚊	雨の音金ヲ敲ク如ク蚊ノ音 山里の蚊ハ昼ヲ嘆ク蚊ヲ 旅人ヲ眠ラスの蚊の力素	二水 去来 沾荷
蚊火	蚊遣火ヲ雨ニ消シ行タル蛍ヲ 一ツ蚊の樗ヲ出ル蛍ヲ	眺堂 百里 立齋
蠅	蠅ヲ追ハヌ蚊のうちの養ヲ 蠅ヲ追ヒ蚊ヲ追ヒ出シ 蠅ヲ追ヒ蠅ヲ追ヒ行ル秋ヲ	琴風 言水 来山

紙帳	其角
	素牛
	野徑
端午	沾德
	曙山
	百里
菖蒲	一境
	三箇
	尚白

幟	胡及
	嵐竹
	百里
粽	嵐雪
	西吟
	言水
競馬	周来
	氷巷
	孤屋

卯月	年ふるき人の咄しや京地寺 おもふ人と尚も京地の空礫	渓石 嵐雪
入梅	雨の御所桜の葉のあるかぎり 蔭の中や鶯の音先入梅晴 梅雨なれや切るを素麺浪の人	春中 洒堂 延年
五月雨	湖のくもまもなき雨 世の人命せくの傘の下	鞭石 吉来 亀角
五月闇	かすかにかすかに蛍ひかりて弟子誉 五月雨世中なる時咲るとも 蕉坊中宮に月見に貢むま	探志 式六 其角
田植	咲清水田明の屋に里同業 軽乃無も物なき弟の田植分 明しに田人の中に西の影	観水 漁人 玉芳
早乙女	早乙女よ結しに屋の風の風 ひとめ見ぬ乙女の袖の陰分 老ぬ乙女田の乳	閻指 言水 景道

早苗

[illegible]苗の[illegible]里の藏　言水
[illegible]の裏[illegible]て[illegible]苗[illegible]　利牛
[illegible]の[illegible]の苗[illegible]　弥子

青田

[illegible]の[illegible]の[illegible]人の[illegible]の[illegible]　許六
四[illegible]の[illegible]　千山

秋雞

[illegible]の[illegible]　河泥
[illegible]し[illegible]の[illegible]　倫女
[illegible]の[illegible]　雪芝

芦雀

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　土芳
[illegible]の[illegible]　露川
[illegible]の[illegible]　言水

翡翠

[illegible]の[illegible]の[illegible]　景道
[illegible]の[illegible]　如柳
[illegible]の[illegible]　嵐竹

水鷺

[illegible]の[illegible]の[illegible]　尚白
[illegible]の[illegible]　景道

羽抜鷺

羽ぬけ鳥こゝろも今更の蛍かな　渓石

そおしなほ柳にとまる羽抜鳥　波山

追はれし枝にもどりし羽抜鳥　丘明

鶯音入

鶯や入てまた鶯のわすれし籠也　去芳

音を入て鶯のなる日まとはん　時吟

練雲雀

囀に晴て弥生の扇の雀　陽和

豆の花ひらく乳をもちて雲雀練雲雀　木収

雛渡の法の乳の空しき雲雀　巴三

鵜

首たてゝ鵜のはしりのる早瀬かな　言水

あふみちに鵜をやりわたす鵜舟かな　尚白

紫の数の早瀬を渡る鵜舟かな　闇指

鵜飼

あまの川さへ涼しき鵜川かな　言水

あらはるる鉄も鳴らん鵜飼舟　越人

篝火のもえさかりても鵜縄かな　同

鳰巣

亀の背北背のよふに鳰の浮巣かな　嘯山

同川も鳰のうき巣に鳴蛙　其角

氷室

老の蔭のうつもれて也氷室守　負室
暑を拭を氷室戸の中の色　近之
六月の雪樹もゆり氷室守　言水

扇

花束の古刹入の人ら扇　杉風
病人のおもひうつる土用扇　蚊足

土用丁

簾簪の仮名書もある土用丁　負室
色こそ也暑を振へいさらく花　卜枝
あ事しらぬ代あふや古土用丁　杉風

夏痩

夏痩も郭のうらなる夏痩也　如真
夏痩也焼竹をくゆる居　嵐雲

暑

日の暑熱の風蟻の邪　凡兆
もの思ひ〜思ふ暑の日　雪芝
たゝ暑〜簾へたゝ八髪乃高　木節

雲峯

麻の北の帝むむ赤や雲の峯　央邦
八方ふさ川地嶮漠とこそふる　具角
雲の峯ひとゝ接るかもや棟の夕　半残

水無月	夕立も霧の中なる大井川	涼雲
	六月の沢行めぐる蛍こそ	越人
	水無月の踏波こそ大井川	涼莞
白雨	夕立も霧の中なる日の夕	央邦
	白雨や山伏出て入このゝ	万牛
涼	秋涼し宮例のうつり雛鏡	去来
	涼しさや月と花とを夕ぐれ	智月
	涼しさや給仕の砂	句空

清水	玉藻の二葉の清水ゆゝ	園女
	山ゆゝ水の音の清水	露底
	清水の音の清水の清水	徐寅
風薫	清水の音の清水の石の苔	轍士
	洲の崎の山の日ゆゝ風薫	松涛
	風薫る雲の中なる鶴	景賢
心太	杉の葉の上の雲の心太	秋之坊
	四隅の弱の弱の上の心太	其角
	雲の水の簾の中の心太	同

簟	露底
	馬筧
	其角
扇	丹野
	伴自
	良昌
團	馬筧
	許六
	思演

蓮	良昌
	湖春
	苔蘇
荷葉	衍竹
	素堂
	明水
旋花	且只
	言水
	道下

壺盧	夕霧の山伏たれに星たづね	專吟
	夕白ふやうやうの雨の星の	荒川
	山霧のあるうしろ雲ふるる	我峯
帷子	帷子の何うらやましけるも	氷苞
	帷子あるあるうきの行ゆく	丈中
	かうもの日ぬ戸口ふる	万牛
基衣	嬰兒も世間出ぬ衣	尚白
	強ひ傳農強ふる基衣	嵐彈
	濃うふ何ふ基衣もも	含棘

汗拭	扇折ふる持ふ汗ぬ	千那
	汗ぬふ小雪ふ沖出	嵐雪
	車ふふ行ぬ行拭	山店
襟會	身絲も兒の新ふ襟し	丈中
	絲ふふる人の襟も都ふ	其角
	杉のふも青ふ襟ふ	同
祭	絵ふふ祭の牛ふふ	扇雪
	夏ふふも柳ふ里祭	許六
	庭ふふ吟ふ祭	時吟

瓜	高人の[illegible]二番瓜 湖月 日[illegible]新[illegible]ふる瓜の姿 巴山 瓜守も[illegible]御[illegible]さ[illegible]も 其角	
御稜	年の瀬の米とくるる[illegible]の煙 翠紅 河[illegible]瘡[illegible]清稜 荷兮 蚊も蠅もうれつる[illegible]川 其角	

秋之部

初秋	立秋
[illegible]と[illegible]秋の立 鬼貫 宮[illegible]の山伏[illegible]の秋 居中 [illegible]の[illegible]の[illegible] 浪化 [illegible]笛[illegible]秋の[illegible] 由之 [illegible]秋[illegible]角[illegible] 米窓 初秋や帷[illegible]雨 毛鈍	

七夕	酒もまとゝ打てて酒呑星今宵早く合ゐ寄と吟じて蜀々入七夕や梵天伽藍笛と南	去来 山峯 其角
銀河	嵐雪も言かりたる天の川行末のちゝ男新しての川此夜々裙ゝ拂ゝ見れば銀河	嵐雪 加行 木因
鵲	鵲や石とゝもに橋もわる鵲乃橋のうらかなまるゆゝかさゝ行ゐ鵲の鵲ゝ物と二ツ星	其角 木因 負程

燈籠	燈籠の水ゝ暮人と打ゐまゝん唐ゝゝ乃燈籠を唐おゝ美女ゝ義男燈籠ゝゝ迷ゝ家	一笑 未泊 其角
高燈籠	高燈籠高ゝの松ゝ角人魂ゝ消てゝ人すゝの燈籠ゝ家揚燈籠松ゝゝゝの拍ゝ	千那 言水 遊竹
迎火	迎火や揚ゝゝゝゝ松ゝゝゝむゝゝゝ孤の影ゝゝゝ	一映 其口

迎鐘	打ハ寄ハ物と志りてや迎鐘 抱ふて撞ふ雑をむしろ	嵐雪 春富
施餓鬼	墓やハ門ふたりく施餓鬼棚 石塔ゑせきこの柳の崩まゝり 庫音ゑせこの義分深々のか	荷兮 文里 百里
墓参	見る人も今ハ孫ふ面墓まゐ 盂蘭盆や墓のうゑ四ふ墓ふ 墓ふ系ちるハ柳くの系ふて	去来 阜袋 立縁

亀祭	同一本ふ人もあわりゑまつる 麻乃ふのうゑ紀ふ祭 亀ふ祭る富ハ吸薄ふ	雲口 去来 詞柳
蓮飯	祝ふてもゑわりふ道のハ 松の葉ハ白むら飯と道の飯 亀の石ふちする薄ふ道の飯	一髪 支考 同
麻箸	似合ハ白ふ祭ふ麻ふ麦 ふき人の数と芋ふ売ふ折ふり 麻ふ麻ふ麻ふ麻ふ麻ふ麻ふ	亀洞 全峯 惟然

風尾草	嵐尾草の袂なるかな同の邦	梅氏 桃妖
生身亀	せをそて魚の骨撰るのを生身亀 うきをうら記文を拡へや生身亀 せ身亀をうちかへ人糸技ほそ	方山 百里 亀洞
盆月	盆の月寝るうつを打うり うちむうふ稿れ自ら盆の月 踊うを思ふ孫て盆れ月	野坡 李由 同
送火	送火やうう踊ほ子の袴腰 うとややう人並ま遊すうも おうりはる踊をうる男分ふ盆伸ふ	央邦 柳江 亀翁
花火	花乃次ふほうを思ふ系ふうふ 花をて踊ふきうの合ふきうふ 盲ふうふ船ふうを花ふ	神寂 桂夕 春雷
踊	里踊火ふ紫をかうを 踊ふ農盛形さうふ月ふ ふをうを待人遅ふ踊うを	安之 去番 尚白

相撲	都ふる住吉の浦の力取 相撲とり並べし秋の風綿 裸身は白しや相撲とり	去来 嵐雪 許六
秋風	俤は世の既の衣秋の風 ちるは秋庭刈跡の秋の色 秋風やとまれのるもく	野童 越人 来山
初嵐	翁の尾は伏もまれ初あり 初嵐ふるは小屋山嵐ふるり 日とあれば定まる初嵐	荊口 濁子 嵐雪

暴	あるいて来る俗川世ふるふ 温泉煙の地を這て川世ふる 小原女は野ふるもしかの一茅	猿雖 東睡 園女
露	ふる川露は拭の外芝の紀あり ふるふ川ふるあるの中の露 朱鷺啼て命ふ露ある山路出	去来 孝和 舉白
霧	有雲は雲ふ霧は時の霧浪 霧雲は雲ふ霧とふる霧の雲 帆柱の霧ふ雲は雲の山出	其角 乍鈍 北枝

稲妻	稲妻の明るく野の白し　臥高 古簾稲妻あらるるかたつむり　立吟 稲妻の照る簾の隙　路健
虫	蓼生ける新道辺の草の露　玄梅 菜畑や二尾の車の虫の声　尚白 虫ひとつ鳴かぬ夜中の虫　句空
蜻蛉	赤とんぼ蜻蛉帰る夕暮れ　惟然 蜻蛉の飛ぶ時あるる眼むるか　知足 冨士の裾ひとつ蜻蛉の飛ぶ時　横几
蟋蟀	蓑虫の蓑たる枯るる山蔭かな　如行 木螺の鳴くや苔の屋根の風流　淵泉 ひとつ虫の鳴く音の風流　鋤之
竈馬	かくれ家の笹の上に遊ぶ竈の上　孤屋 暁の尾花に凄きいとこかな　掉哥 竈馬や新しく帰る北枝
蜩	日の入りの山の蜩の音　諷竹 ひぐらしの鳴くや蜩の音　風麦 ひぐらしの蜩もある神の森　立祖

蟷螂	蟷螂の枯れ草の穂の高き哉	央邦
	蟷螂の子を抱きし稲穂哉	千流
	かまきりも裾掛かりてさうつく	十丈
松虫	松虫や雲の白い山	沙明
	雲もなんとも言ひ難き嵐	嵐雪
	海ちかくて松虫ばかり	其角
鈴虫	鈴虫の鳴くなるべき稚子哉	桃狀
	すゝ虫やいとゞもたんぽの道	桂士
	鈴虫や淀の行かうもたて	其角

秋蟬	綿の箱小巻きまるれ秋の蟬	昌房
	鶴文くるの子のもとむ秋の蟬	松吾
	秋の蟬なれも温泉ばかりしる	千那
秋蟬	秋の蟬死る秋の蟬	丈中
	うき事を追へ来るも秋の蟬	晩山
	秋月色樹々の蟬なれば	百里
秋蝶	樹の葉の吹き出でまるる秋の蝶	舟泉
	稲の穂の出でまるる秋の蝶	言水

冬蛍	鳴てたる蛍の声
	ひぢち田の蒹くりたるいふこゝ
	風子
蟋蟀	草の葉の足の折るゝ
	荷竹
	智月
	凡兆
柳散	其角
	湖水
	望一
桐葉	嵐薫
	杉風
	蛇石
木槿	嵐竹
	央邦
	万牛
雞頭	

菊花	おもしろし秋ひめてる菊花の姿	濁子
	世をいとはれまる地のあり	呂風
	杉ゝ山ゝ樵る流水折まり	杉吾
蕣	陳ある蕣井よりアリ	鴎歩
	朝白ゝ咲ゝ花ゝ美き	方磨
	あさ顔のひらる垣の際	平交
秋海棠	秋海棠秋ゝ流の市ゝ所	琴風
	紅ゆゝ秋風素の咲ゝ	凉苑

萩	中刈ゝ残れる萩の葉	李子由
	第戸柵や萩の花	志賀
	外不ゝ小萩ゝ庵の	去来
	人ゝ少け雨戸ゝ萩の声	雪芝
萩	分農秋ゝ萩の家ゝ風枕ゝ	呂風
	名ゝ知ゝ小仲ゝ咲ゝ垣ゝ邪	素堂
	世ゝ遠ゝ笹ゝ入ゝ垣ゝ世ゝ仏	百有
野菊	山伏の菜ゝ世ゝ遠ゝ	越人

芙蓉	呼人	其汀
	晨明の雨ぬれて落る芙蓉哉	風麦
	夏合いまを芙蓉語る今の中	
蓮實飛	百里	猿雖
	蓮の葉もあるて地のかちゝ向	素堂
	蓮のくゝもの泥濘とゝ何ぞ	
蓼花	其角	風凡
	初蘭沖没ぬのさゝもの蓼の花	木節
	鮎切峰四五日和て蓼の花	
	木屋ぬくゝ傍よりまたてのゝ	

葛	嵐竹	防川
	葛の葉の裏ゝ白ゝ見る時ぞ	朱拙
	もゝくゝて山ぬ葛の花	山店
芦穂	丹堀ゝ	亀洞
	一ゝの芦の穂ぬ丹堀ゝ	路通
	川ぬ沖ぬ港板かくて芦乃花	
	芦の穂ぬ招くゝ乱ゝ	
蘭	桃隣	嵐雪
	葉の雫ぬ角ゝ地手	如水
	盗くゝ葉ぬ花の蕾乃下	
	外ぬいさゝ乃の俤ふらふの雫	

芒	荷兮	毛一切て帯揚とふくる芒哉
	俊似	年〻衆古根よりこぼれすきかな
	牧童	芒薄石ゆきかくす一面哉
尾花	李下	行庵り尾花打ふ指の哉
	松吾	吹おろし吹のかる頃の尾花哉
	其角	野の弱乃尾花嵐吹とる尾花哉
番椒	野坡	石垣ゑ根こそぎ抜ける番椒
	胡及	黄ばみ色いまだもあかし
	史邦	鶏ゑ抜ゑ植あるもあるこ庵かな

苍野	野坡	山伏の切ゑ切ゑ苍野哉
	任口	中〻〻刈ゑ者も荷ふ苍野哉
	志友	苍野ゑ牛ゑ人ゑ怪ゑ
草花	野坡	草ゑ苍野ゑ抜ゑ草花ゑ抜ゑ
	太柳	下〻〻ゑ奇麗のゑ中の哉
	詞之	仲哉〻〻紙のゑ哉鄙の市
芭蕉	依之	ゑ七夕ゑ八幡て後の風ゑ
	加生	秋風ゑ芭蕉のゑ〻ゑ哉
	乙州	芭蕉ゑ植ゑ〻ゑ月の新

葛	越人
蕎麥	扇雪
木綿	卧高
	素堂
	乙州
	荒雀
	卜枝
	松吟

西瓜	素人
	素堂
	一江
瓢	沾圃
	桃妖
零余子	為有
	野徑

八朔	八朔や如意寺のまくり敷 八朔の酢のこくもうまし鯰哉	沙葉 許六
三月	三月の蓴の天窓をかくす哉 約束の小豆も出んこの日哉 三月や小ちのき日暮れの おろくもむこの有所はなし ふるさとの海の有様哉 春の須磨の桜ぬきうり	之道 去来 素堂 智月 露川 胡及
月		

待宵	待宵や男の子のあいあつかい事 御人を出す行事のやすみ	牧童 羅人 同
名月	名月や折もあんん猿おろし 名月や子居の子も抜ぬけら いさらしやたりうの子の色	信徳 轍士 湖春
既望	十六夜や有るを出て帰る人 既望ふるまいぼ抜きの宗	去来 許六 猿雖

後の月	後の月たとへ宇治の巻あらん	越人
	家遠き男親に栗や後の月	其雪
	家ちかく人も来そめし后の月	其角
駒迎	一声や雲破るる弱き声の影	去来
	川鬚も旅のまぎれや駒迎	荷兮
	弱迎しの馬にかりい行衣かな	正秀
放生會	尾を振るいかまぐらの情け放生會	季吟
	又ふ程なき世もせしら放生會	泥花
	乱るるまぎれ人ぶり放生会	松窓堂

初潮	満汐や帆かけ船の初潮や	嵐薫
	初潮や磯山まぢかの家いくつ	半残
	買ふて行塗り物や初潮の波に乗り	凡兆
稲花	禅つのうつ[illegible]稲の花	露川
		芝柏
稲	稲の穂の穂の穂の穂の穂の穂	雷洞
	世の乃かまいふ郎稲の穂	土芳
	稲むしろ近江の国の[illegible]	浪化

早稻	曲翠	早稻の苗や田植の人出入 早稻も植るまでは大きの苗 世のうき田も植て嬉しの秋のあり
晩稻	支考	稻刈世間なる晩稻哉 ちまちまと山の畑の稻刈て 晩稻田の縄ちる方也本道
落穗	路健	遠水
	其角	新の卯うら稻植うか 拾へとも〳〵肩よ落かの手紙と
	卜枝	禅門の数珠持たる落ちか
	木導	

案山子	凡兆	ものゝ言ひとり倒るゝ案山子 さけるまでる人行秋のかゝしかな
	正秀	山伐の案山子飛て笑ひけり
	重五	
鳴子	丈中	谷越て鳴るの温也寒のうち 山圍ふ小杉のうへも鳴る鳴子
	峯雪	
	古梵	此村の垂房懸ふる鳴子の音
引板	路通	夕雲に若葉ふる引板の音 山深ふ日の色の虫引板の鳴
	亀洞	
	秋色	鹿の引板屋ふかくる寒もうか

添水	きれ〳〵に添水の響もすめる風かな 影さやか添水の音乃道さえ	虚口 普船
鳥驚	あるかなきかに花ちる夕の雨 稗畑の僧やさえたるおとし	一酬 涼莞
落水	秋もさやかに雨のもり来 雨乞に里もあらしの落水 ちるもしらぬ入りさしやかに水	昌房 古梵 同

落鮎	落鮎の下るふるまる渡しかな 落ちもせぬ雲ちらさぬ岳の嵐哉	一桃 重頼
秋作物	栗園に栗まで赤く入りかな 黍の穂に遅したる色哉 秋の田をさかりて稈二俵	空方 越人 尚白
新酒	新酒の人の酔やさめ嵐雪 足あらふる亭主に回る新酒かな 月始酒に初るかなしや井の筒	支考 虚谷

鶺鴒	野水	鶺鴒も僅赤らむ柚のうら
	央邦	帰るべき日の冷しく鶺鴒の
	允兆	百舌鳥の鳴き入りさる小雲原
鶯	支考	牛呵るも暮るる夕の鶯
	言水	石ばしる音に鶯ふる
	肅山	鶯の寂るる夕の羽田哉
消ぬべき	立芝	消ぬべき雪の中なる鶯哉
かはるべきつもる雪のうつ哉	琴風	かはるべきつもる雪のうつ哉
投網の袖ぬるるきく鶯の哉	正秀	投網の袖ぬるるきく鶯の哉

木啄	太章	木啄の入るるとなり藪の雀
	雨桐	雀なるべし樹も木啄の日もすがら
	曲翠	木啄の枝をたたく住居の那
鶺鴒	氷因	せゝらぎの水や去るる小川原
	游刀	秋の日を打ぬ鶺鴒のせゝらぎ
	麿盤	せゝらぎ鶺鴒や鶯なき移る時のうく
鳩	野水	寂しさの鳩の啼くもあるるかな
	肅山	鳩や大山なるべき雲はこう

鹿	列〻鹿死て笛吹く大山うち 夢覚て山茶花の咲くあり 鹿の音ふ人の絶たる夕くれ	道牛 其角 一髪
菌	草枯れて松茸ばかりあけるる秋もくれ 菌狩りに行くあぬさ秋の山ぶこと きけ狩も茸も見ぬ秋の夜	全峯 素堂 利合
松茸	松茸や蝶よりあとの夢の夢 松茸やたちふるのふくら雀 松茸やそれつれ〻の雲風	孤屋 吾仲 素堂
初茸	初茸の香ふる陳皮小西瓜 ふる茸のうちに蕾日新し	沾圃 智子 沾蓬
柿	渋柿を数の中ふる山の月 播ふる柿ふる杜の秋ふる 渋柿や渋柿さびし秋の心	呂風 正秀 其角
栗	さく栗の咲けさるる篠波 栗ふみふるる山路 日暮れ月吟入る栗の色	立路 其角 秀雨

團栗	弥生栗色ふかくして寒酒 栗をくりも落るも流れ川 うんくりの紙為て石仏	杜年 其雲 為有
椎	椎拾ふ人通なるやまみち 中絶る椎をもとめて落葉 ひろはぬもあるもはの売	夕潮 丈中 ゆし
木實	彼らいく木毎の藤の実 桃の売ものの山乃木毎みよ	李由 嵐雪

重九	落栗の銭あるもとて行ひ 笠くりも拾ひて売ぬ猫付 菓子屋も色よく出て九りゆ	観水 逢雨 桃隣
九日	余所中にそこふかくの菊 ひくなりて菊能ふと思ひより 人数の白ひとそふのきく	和及 二水 浪化
菊	白菊の花ばかりにあるき 一色や根の男山ぶくの菊 花ゑる力もなくて菊の雨	昌碧 暁龍 軒柳

残菊	菊の露を枕に置いて酒を飲むときの詩	素堂
	菊の露を酒に浸すときの詩	望水
擣衣	菊の露を砧打ちゆるけば沾ふ	立志
	菊の露を砧にかるるきぬぬれ	峯白
	小夜衣の臨体うれしき宿	横几
露時雨	乗壺酒の露時雨	北枝
	酒の露地あの笠無き露時雨	丈中
	露ぬれ川辺静かに寄せたり	遠水

秋雨	秋の雨時雨の風吹く人を除く	尚白
	秋雨に打ちつきて鶴をたくる雨	野水
	小男鹿かくしけりや下紅葉	峯白
紅葉	加川を御屋敷とする紅葉	秀和
	毛氏の紅葉に張る袖つゆ	其角
	秋の夜下ち笠の油さしに	八木
秋夜	秋の夜を寝ぬ男人の笠の	好春
	初秋と後夜の秋とあるべし	許六
		未山

長夜	旅中外ル孫	去来
	くゝ里国と尺ほ歩き枕ル	治徳
	つきくりしきる水の音長風き	野水
夜寒	あゝ寒ル秋の近ク長ル	睦上
	松風ル彩酒とさ田ル長ル	支考
	ともすれの秋ル程の音長ル	丈中
鴈	小きくるる秋をさる数の鴈	其角
	初雁やとの云たる東の雨	松吟
	うゝ雁とつるもの云ル清	魁貫

秋暮	傍の山る磯の篝也秋の暮	不吹
	秋の暮灯やとゝもさんと岡る暮	越人
	立ゆくゝうゝ秋歩も秋乃夕	嵐雪
行秋	行秋よ蓮も枯き袷ル	牡年
	行秋と蛙の鳴ル	央邦
	ゆく秋と胡ら秋ル	乙州
秋雲	前栽ル面のうへの秋の雲	洒堂
	秋ル雲ル秋ル山ル秋の雲	丈中
	山ゝ也一美ル秋ル雲	涼菟

簗	うへ[illegible]の栖[illegible]簗 簗[illegible] くも[illegible]簗[illegible]	丈草 防風 心水
渡鳶	鵜[illegible] 山[illegible]	去来 丈草
鮠	啼[illegible] 川音[illegible]河原の[illegible]	一口 涼莞
未枯	う[illegible]枯[illegible]樒[illegible]日[illegible] 未[illegible]人を[illegible]東[illegible]雀	白雄 同

冬之部

初時雨

[illegible]杉[illegible]雪[illegible]山時雨　苅口

初時雨何[illegible]出[illegible]袖ゆふ[illegible]　端水

[illegible]須の垣の[illegible]紅葉[illegible]　湖春

時雨

[illegible]地の[illegible]時[illegible]雨の中　同

あま[illegible]時[illegible]雨[illegible]　其角

海[illegible]の[illegible]　丈中

志巻	松芳	同
品切	木道寺	嵐雪
爐開	其角	山店

炉	野水	路通
火桶	一髪	露言
火鉢	山峯	園女
	秋色	楊水
	芦本	

巨燵	桃志	巨燵とり寒ぎを凌ぐ
	雪志	宵のうちまだ古墨を火燵かな
	我峯	
炭	戰竹	炭の匂ひ
	嵐蘭	炭を焚き炭を拾ふ
	其角	炭の香も其年の花も越てゆく
炭竈	凡兆	炭竈の煙の横に倒れ
	子冊	炭竈の口に焚る日も乃ち
	不吹	すくうまとて孤よむ法師かな

堤火	班車	うれうれ夜の明るを入る朝朗
	巴人	堤火の地を焼なりき蕨の巻
	神寂	うつくしき笠をかぶりて白ひるか
榾	似竹	炉とめる金沢榾乃懸
	去来	榾の火の親の足さし焼雫か
	探志	榾乃火の飯の炊の加減哉
十月	幽也	十月の出つまるる月哉
	尚白	十月の神まつる庭のすみ
	来山	粥まつる十月の鐘の響哉

神無月	為の岳神社抗より神ゝ出る月	山店
	禅寺の紅葉	凡兆
	神無月 竹枝	言水
神送	神送の朱の鳥居	卜枝
	書の名残あり渡り神おくり	越人
	月も出て来ふ神の留	李卜
神塁	鶯の名残 踏離れ今り神の留	神叡
	神垣の留るもの源左史	涼莞

小春	紅葉して小春の源山の南	言水
	紅葉しても小春の名残	李由
	時雨るゝて一日小春ふ	路通
達磨忌	雨ふる中に達磨忌	竹良
	十夜の小雨の鶯可那	梅葉
	達磨忌時雨る寺の法燈	李由
十夜	淵静かなる十夜ふ	路通
	河初る法花十夜場の鐘	杉風
	禅門の葦見仏十夜法	許六

御影講	清新薄冷の一の座敷	買奥
	抽き柿も掃きすまされ清令濃	沾圃
	上人岩屋の箱おけ清新濃	央邦
御取越	あすの夕宵の乃の稲清新	芭字
	松の御忌の合せ清令濃	養誥
	清新濃一生涯	嵐竹
蛭子講	炉かこの安堵となる更濃	去来
	生業のかき海老更ふ	しら
	酒瓶の上の鯛の新濃	木曲

神迎	何ぞ神の里の神迎	如琴
	清令濃清新神迎	當覚
	神迎ふ子の黒の口	珍碩
顔見世	新しき世の嗚いさむ下邸の	其角
	うらうらの冥も罕なる春	調竹
吹草祭	作山の吹草祭おろし炭	李由
	掃き刈て吹草祭作連を	調竹
	清令濃の白浪	李濃

冬至	つゝの小家も松ふかゝる雨	允兆
	蓋のゝ如くすゝ伸し冬至の雨	乙州
	本のゝ如く二日の月ぬれ初る	仙崖
風	冬ゝ如く里の名取く法螺貝屋	荷兮
	風寒く義士ゝ丸ふ小鄙ゝ	尚白
	黄金の俤ゝ冬木ゝ	殘香
冬木立	砂ゝけ初る海ゝ方への冬木立	琴風
	心ゝる僧ゝ冬木ゝ	允兆
		卜千

冬山	狗の鼻ゝ積もる山	素牛
	狐尾吹ゝ凍ゝ山	氷巷
冬日	冬ゝ初ゝ二十ゝ日ゝ狗の鼻	友五
	冬の日ゝ行ゝ暮る牛ゝ	調竹
	民家ゝ出ゝ冬ゝ日ゝ	洗悪
冬月	冬ゝ月ゝ猿の歯ゝ黍の月	其角
	魚屋ゝ延ゝ歩ゝ冬ゝ月	里東
	只ゝ冬ゝ月ゝ冬ゝ月	我君

冬夜	何となく冬の夜は情とこそ思ひけり	其角
	冬の夜乃風の音も雀とも	素風
冬篭	冬篭歩を乗り出す山風の	杉風
	冬篭行儀てもとの衾哉	彫棠
	冬篭淋菓子売のたまり酒	野水
冬構	古寺の笠ぬも青しうそうまん	仁兆
	橋ぬ木の流ぬまちかまえ	両梁
	冬構延也あらうまま	祖巴

寒椿	いつまでも一庇おくせい家ぬきき	亀洞
	寒椿ちらぬ物なる楼	木因
	寒椿白なるめ久つきき	同
枯菊	色くの菊つくて枯ぬまり	柳水
	枯菊業扶ぬ拾い紀州も	嵐雪
	菊花四ぬたく新の墨ぬ	杉風
寒菊	寒菊の色を何つきぬ	湖風
	かん菊業ぬ古流沢く日和の事	嵐舟
	寒菊四流ぬまま雪彩ぬ	許六

枯芒　配力
一髪
杉風

氷仙　惟然
一晶
專吟

茶花　猿雖
正秀
色風

石蕗　調竹
胡友

帰花　其角
曲翠
耒山

茶山花　言水
李農
柳土

枇杷	農月の新すきまし枇杷の実	宗乙
	いつ咲てはゆ実をしたれ	尚白
	窗ふるる実練つまり枇杷の実	乃松
冬牡丹	冬牡丹実ゑるまきたる	尺中
	冬牡丹ものの一つ咲	依之
	うきあるる古れ思ふる牡丹	杜旭
木葉	大ふるの木の葉あるも色の光	杉風
	おもひぶしの木の葉の重の数	沾徳
	岸の月ほやかたる木の葉	其角

落葉	義母の寝乃葉さへ落ける	玄梅
	落葉ちの俄雨きく葉の音	柵雪
	ちるはきの蝶かなる落葉かな	巴風
枯柵	何ものかさらふものの枯柵	涼莞
	余の木のもの思ふ柵の外	越人
蕎麥	蕎麥刈畑の雨の伊勢のはな	素竜
	抜ぬけるの跡の蕎麥花かな	桐實

麥蒔　昌碧
むぎまき　漁弓
のまき　一井

大根引　風國
今やもまだ　俊似
漬の大根　洗ふ舟　夜ふか

千菜　一峰
一菜　探丸
　　汶村

葱　雨橋
ひとまき　百花
時雨　汶村

蕓　崔釜
山里ふる　依之
　　松芳

霜　杜國
霜の朝　呑舟
ものくさき　全峰

霜夜　野水
霜柱　尺中
千鳥　其角
水鳥　囲仙
野鴨　野童
鴛鴦　凍鬼

霜夜　野水
霜柱　尺中
千鳥　其角
水鳥　囲仙
野鴨　野童
鴛鴦　凍鬼
千鳥　丈中
水鳥　冬柏
野鴨　去来
鴛鴦　湖風
霜夜　才麿
霜柱　竹木
千鳥　嵐雪
水鳥　雷虫
野鴨　木節
鴛鴦　野水

鶺鴒	鶏鶺	鷹
郭細和歌の下裳かかはる里	雪乃日々降ふるとなく	珍妙なる尾とは
桜木をくるくるとまたるの勿つり	鶏鶺鴒の鳴くなるかな	焼燭の鶯の眠のひるるとか
後撰はやぶ雄鹿を駆くるつり	昔乃ふ時ふるとなく	鶯時雨ふるの重衣の袖
柴車	依之	冬市
更明	祐補	木導
冬村	許六	遅雲

暖鳥	木兎	追鳥狩
妙なるの鶯の命の中	遠ちの	芝の里の追ふ狩のそふはつ
暖鳥いつる海苔とおもふ	木兎の眠中ふ	一峰
放ちやる鶯あるなぬるめる	木兎の眠中ふ	央邦
丹丘	芝境	
柯上	半残	
藤白	薫中	

冬蠅　有金し惜るとゝあるの蠅　央邦
生て飛くらゝ身を搦のゝて冬の蠅　嵐亭

苍臍　鰹鯛の腹を何ふさゝぬふ　其角
あんこうを先除ける厨こゝ第　莫陵
るは中の外皆あんかも世の色　山夕

空鮭　こゝ鮭や死ゝる時の口もあき　雪芝
来ふゝかゝ鮭仲ふ嵐こゝ中　乙州
ゝ鮭や京ゝ家後る魚の舌　除風

蛎　出ゝ蛎ゝ蛎ゝ蛎ゝ蛎ゝ蛎ゝ搭ゝ女　嵐雪
かゝむゝ蛎ゝ昌ゝ蛎ゝ蛎ゝ汐ゝゝ　其繼
うすゝしゝ拍ゝ蛎ゝゝ蛎ゝゝ　荻子

夜興　ゝゝゝ興の夫ゝ蛎ゝ　氷苍
家ゝ家ゝ夜ゝゝ興ゝ　工齋
三日月ゝゝ興ゝ　拳白

河豚　蛎ゝ汁ゝ米ゝゝ仮ゝ　檀泉
鰹汁ゝ本草ゝ出ゝ　其角
ふゝゝゝゝゝゝゝ　八橋

鱈

生海嵐

鯨

和重
圃指
李由

去来
嵐雪
露沾

野坡
吉女
万牛

網代

霰

寒

丈中
其継
林長

卯七
暮年
杜旭

桂之
木導
卧高

寒中　千川浪化
寒声　仙杖加枝
寒垢離　乙孝
寒中　路通
寒垢離　毋風
寒垢離　取具
胝　冰花
胝　吾東
藥喰　支考
藥喰　山夕
藥喰　芦本
納豆　汀芦
納豆　除風
納豆　丈中

紙衣	文ひとへ紙の切を張りて油引して雨の道〻歩行
頭巾	隠れ蓑四方行耳をおほふ角頭巾
食衣	何事も麻ゐるまでなく紙帯食

丈中	只吟
舟行	蟬吟
毛純	其幄
小春	尚白
千邦	

足袋	古足袋の四十日ふるまでも雨〻〻国々足袋ぬく麻足袋
湯婆	産乳女の湯婆ねためん待の雪
初雪	初雪人のきえい朝のうち

嵐雪	桃隣
巴雪	利牛
月下	嵐潭
正秀	紅雪

雪	去来	遠くとぶ打や雪の岡
	猿雖	雪の日や藁屋墨する家もあり
	嵐雪	門前雪何と盥をすてしぞ
霙	谷鉄	門の外よ傘たむけられしか
	去来	松杉よりひあまるる霙の水
	画好	ふるれば雪の紅葉哉
雪吹	去来	引ずるや柳の雪の蘆
	乙州	海山をふくる雪の
	湖春	岩壺の掛下ちられ

兎	野童	橋梧の葉ふる数を打ふ山陰の小
	嵐雪	鼠ともうきんをあはせ
	好春	武士の角ふ法ん雪もの水
樏	合咕	はるの雪ふる樏のもも結ぶ
	一井	厩よりの雪引出る馬の水
	長虹	黄ばみて雪よりふる物入ル
橇	道遥	ひとりの橇のもうもう世ル
	嘯花	家々の雪也橇もかよふまし
	紅紫	かんたる也相と誠ふ山境

氷柱	川越し馬の尾ゆゑ氷柱	虚吟
	帆柱の氷柱ひすがら朝日哉	琴風
		其角
氷	枯芦に氷を残る出汐哉	苔蓼
	豆代や樽の氷のうすし氷	許六
凍	凍付きの凍付のうつ篠の凍	秋坊
	うつ鳥の魚とりつる魚氏凍	水央
	大こ元死の牙の鳴出柱ゆゑ氏	其角

神樂	闇ゆゑ男哥もめぐる神ゆゑ	利堂
	大鳥ゆゑ神楽男ゆゑ	紫雲
	清神樂ゆゑ梦ゆゑ	去来
寒念佛	鳴の後ゆゑ念仏	其角
	切るる音ゆゑ仏ゆゑ	鹿堂
	哥ゆゑの撞木ゆゑ仏	支考
鉢扣	神ゆゑ紀ゆゑ仏ゆゑ	乙州
	ゆゑたゆゑ表ゆゑ紀ゆゑ	山峰
	ゆゑ鉢ゆゑ扣	去来

臘月	家同のもの共八日より寒に入り 猟人ども雑炊の菜の味	杉風 惟然
	獺ハやゝ物たらぬ顔して狩	木導
御佛名	鼠かゝ清書罷のこと御佛名	落桐
	老らくの私も書しる伝名	去来
	御名の礼を獺くゝ祭り申	野水
煤拂	煤くゝ寺八月に度御ゝ	不卜
	煤拂の祝ひ〳〵雪のうへ	嵐蘭
	家〳〵ものかゝ残くゝ煤拂	祐圃

節季届	同かゝ事とゝやゝ節季の借	一洞
	せくらゝものゝ日よりくゝ御ゝ待	浪化
	節季ゝものゝ遅あくる	惟然
師走	山伏の足事よりも沙さゝ	嵐雪
	雑ゝ新ゝも有ゝ師ゝゝ	紋水
	うちもの人小豆も市ゝ沙さゝ	正秀
鍋搗	餅搗やゝとかゝて行男郎花	岱水
	手ちゝもあくりかゝる鶏の樹	嵐雪
	鍋ばゝの顔ゝ鳴ゝ	佳峯

年忘　年忘の酒を桃園に汲むも　洒堂
四つの山に鳴もかすかに年の忘　曲翠
[illegible]　竹亭

暦賣　古暦売り来る人よりまれ　孤屋
已の刻に売ともまぶれ暦賣　如髪
撞鐘の響いたらぬ暦うり　嵐雪

年市　年の市帝の御うつしの山彦人　魯尚
日くれて市の賑ひ年の市　涼莵

豆囃　豆をとうの神に年中の災ひを祓ふ　其角
うつ豆を戸口のあるかぎり鬼の来　亀洞
むかうにもれて今年の年の一豆　智月

年暮　鄙の尾を掉てもとうの神の祭り　正秀
祭りくれてもまだもとうの年の暮　其角
年の暮彼も袴のつくりかた　杉風

衣配　文箱の先祖伝来の衣配　曾良
[illegible]　山峯
衣配以て[illegible]の世日の[illegible]　望翠

冠見	冠見たること妹はたゝひ男小鄭の門	嵐雪
	おもき立入り雪と邪の冠見れば	允北
待春	待春は松に接ふ書机小口	浪化
	春ちかつゝかまる菜畑弘	亀洞
	待春は氷る蘆ちのうこと	智月
行歳	行年よ立ちとおもふ仕ぶとう	湖春
	行年は親ふ多繁を隠ぶり	越人
	行年の無き立ちの碑岩	沙明
大年	大年は親を俳の伝ひ荷ひ	万牛
	同じ人よ京亀年孔ひとり日孔	仙花
	窪智男日は毎ちの大晋	其角

跋

[illegible]
のを[illegible]
[illegible]
なるものの[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

跋

探遠来題兮兒也角與案兵尋古来人爲爲宗言端之文爲有尤則何條捨之而有孰所可求艸帝爲哉雖芭蕉翁大名従人形天皇之項時宗喫河豚止時分迫者風儀不全穏了共至元録之始而調桑具梟兵然則春秋菴白雄居士摘分具色之花盛耳而集五百題之裝句字而爲

成一卷一幸一今一年也昨鳥子嵯而世于
朽一乎縷梓一亡一師一手一向一霊一亦一此一道一へ
不一誓一哉一示一云

文化一卯歳秋

栗齋
八雲誌

栗

蕉門雪門俳諧書籍目録

嵐雪句集　初代書写ノ句集　二冊
東鷺句集　二世書写ノ句集　一冊
義春句集　三世書写ノ明和ノ句ヲ主トシテ加ヘタルトモ　二冊
同　二編　初編ニ漏レタル安永年中ノ句ヲ主トシ　二冊
同　三編　二編ニ漏レタル天明ヨリ寛政ニ至ル句ヲ主トシ　二冊

雪門七部集　七冊
新茶川集　附合ノ秀句ヲ抜キ出シ乃ヒロウヲ山幸著
去嫌家歌　[illegible]　蕪太著
伊吉千句　[illegible]
[illegible]
百[illegible]の義　[illegible]
武蔵三[illegible]　武蔵野紀行ノ奇記ナリ
秋乃[illegible]　[illegible]　蕪太著

一夏百吟集　蕉堂先生発句の集　文章発句の面白きかたあり　一冊

七柏集　雪中庵蕉堂著　紙仙百二十章　四冊
附代変化の体を独吟の奇仏ゑ　其発句をのべ先生著述中の中世一の著にて俳諧に志ある人はかならず見るべき書なり

探花集　雪門名家発句集　初編二編三編四編春夏秋冬　完来作　共六編　完来作　共七冊

芭蕉庵再興集　蓼太著　一冊

三春日記　同著　一冊

流波紀行　蕉堂先生と文章発句　碧兄著　一冊

秋山家　業雪著　夢仏　夜兎著　一冊

蓼太附合句抜集　三餐著　小本　一冊

雪のさち　阿人著　三冊

感同珍　東皇著　そいろ紙俳官蓋

鶴起集　蓼太著　夢仏編

附録　雪門名家夢仏発句入

二吟来来紀　たち紙キ角宮氏と二作の夢仏　蓼太著　一冊

鬢くらべ　宗迴世之系乃解　弧乃の拾く　蓼太著　一冊

蓼太句集　蓼太著　小本　一冊
蓼太句の中に秀逸の句を選　小本一冊

附合小鏡　牛家著　小本　一冊
二餐の解月花の変化の句の中解　其外附合の便にあるべき故人の説をくわしくしるせし

七部さがし　東登述　蓼太著　小本　一冊
七部集の中解　門人の写記　著る集にて七部の例に洩　著るくんてあるべくもなし

色紙草　七冊
雪門名家俳諧　蓼太著　雪門法家秀逸の句を明らかにしてあつむ

選華舎集　蓼太著　三冊
表合　四季　發句　先生　又月花の句程　南海文章入

心ひとつ　文毋著　三冊
月巣四季　發句集　其外　雪門歌仏をおかく集む　画入り

雪門報恩集　完来再訂　全二冊

△十二条　蓼太述
附合発句を入て俳諧の仏ばしとなすこと疑なしいと

△花ごんも　日述
正花　雑花のゆとりなくしくなるを

△糊さげし　蓼太述
用くの会に門人冥先生自著なるをは歪しらるを出まして俳道に益あること

さるびと大全經回　蕉著一冊
此古人著述の中に俳諧の名を正しくなれて接合を正しくなる

吐月句集　附梅笠　冥麦著　二冊
子雅亭の発句とあるべし

江の浦まつで　完来著　紀行あり　一冊

雪門発句類聚　四冊
輔著　嵐雪とはじめ雪門古今の句とあつむ

同二編　同著　四冊
右に同じ嵐雪の句なしあつむ

かし海紀行　完来著　梅人行　一冊

俳諧名数　情中本　一冊
俳書は発句附合文章かごに入用の用文門地獄ゑどの土産にわけて七夕の七地ハ天門の数にあり地獄すハ諸国の八宗人事すハ年賀の美名釈門美忌日の美名ホ其外さまくの変をあつめ俳諧夷曲にかなつて雅趣に移る我ら人の書室乃本なり

さる奇　治涼著　杉本一冊
去嫌と奇にして会席の一助とす

吐会名勢　雪門会とくへしく絶ス　小本　一冊

ふぐり衣　吐世完来述
蕉を尊ぶ独歩寺の記そ門人の手伝あり

つぎはし集　完来著　梅人行　一冊
去同の紀行なり

松島猫吟　同著　一冊
芳もう川軒の栗ゆく仏

いろはぎし　完来著
四十八字皆切字にする発句をつぐと

完来文庫　文元先生の文章とあつめおもしろく出来なり

俳諧發句天百題 春秋菴著 文化に成つき古人の名句をあつむ 一冊

荘丹著 之義乃 発句に注釈を加へゆる 三冊

其角発句 二句解

場山の井補注 場山の井に注釈を加へゆる 雪茶著 一冊

右の外俳書何にても仕入申候

○俳諧連歌の書物の集物素帖の類板行仕之御便宜に出来り宜敷出張致候働キ御用ニ仕付可申候

書林 江戸本石町十軒店西側 文刻堂 西村源六梓

京山先生篆刻取次 水昌物産 乃事 牙下 逸勢 佐勢 味多 秋月

文化六年己巳七月發行

京三条通寺町西ヘ入 菊舎太兵衛

大坂南本町二丁目 葛城長兵衛

全心齊橋北久太郎丁 鹿島忠兵衛

江戸本石町十軒店西側 西村源六